

チエリツプ。

四季だより



1997. 夏号
Vol.3

植物画を描いていると、「一番好きな花は何ですか？」と聞かれることがあります。私にとつてはちよつと困つた質問です。描いているうちにどんな花にも愛着がでてくるので、どれが一番と言われても弱つてしまいます。でも何年もこの仕事をしていますと、心を魅かれる花もあります。そのうちのいくつかの花のことなど、少し書いてみようかと思ひます。

ので、形がとりやすかったのです。かえつて染井吉野などは一重咲きで色も淡く、花の時期には葉もでないので苦労しました。桜の花びらは薄く、弱々しくみえますが、咲き終るまでは散ることはありません。優しい風情ふぜいのなかに強いものを秘めているように、私の好きな花の一つです。



「里桜(一葉)」

日本にはたくさん種類のすみれが咲きます。里山、人家の近く、海岸、山地などそれぞれの土地に適したすみれが咲くのです。また花色も白、黄、ピンクに近い紫や青紫までのさまざまに紫色がそろい、姿形ともども可愛らしく人気のある花です。春に野山を散歩して小さなすみれの花に会ったときなどは、それを絵に描くことのできる喜びで、思わずにつこりしてしまします。ところが、そうして描いた絵が印刷にされるとせっかくのすみれの紫色があまりきれいにでず、がっかりすることよくあります。

も可愛らしく人気のある花です。春に野山を散歩して小さなすみれの花に会ったときなどは、それを絵に描くことのできる喜びで、思わずにつこりしてしまいます。ところが、そうして描いた絵が印刷にされるとせっかくのすみれの紫色があまりきれいにでず、がっかりすることもあります。

何度となく描いています。が味のあ
る花です。紅紫色の六枚の花弁を、
くるつと巻きあげるように咲き、厚
地の葉には紫色の斑紋が浮かび個性
的です。一つ、二つ、咲いているよ
りは群落をつくっているほうが見応
えもあり、いかにもこの花らしいの
ですが、近頃は大きな群落も減つて
いるような気がします。宅地化が進
み、落葉樹林が少なくなっているとい
うこともあるのでしょうか。発芽
してから花開くまで七く八年もかか
るこの美しい花が、いつまでも咲き

つづけられる環境があるように願ってやみません。

茎がつるのように伸びてその先から、何輪かの大きな花が咲きます。花色は黄とオレンジそしてピンクを混ぜたような柔らかい色です。

真夏、どうしても仕事でこの花を描かねばならず、植物園に出かけました。遮るものさかえものの無い日射しの中でスケッチは、正直いって大変なものでした。首に巻いたタオルはすぐ



においたちつぼすみれ
「勾立坪堇」

「かたくり」



椿

これまで何種類も椿を描いていますが、その中でどれか一つと言われたら私は**敷椿**を選びます。真紅の厚い花弁、照りのある濃緑色の葉、白い花糸の先の山吹色の花粉、といった具合で、色形とともに、足したり引いたりするところのない美しい椿です。暖かい場所ですと二月頃から花をつけるので、冬景色のなか敷椿の紅い花を見つけると、その彩りのあでやかさに一瞬目を奪われてしまいます。

チューリップ

これも仕事が縁で描くことになった花です。チューリップ四季彩館におじゃましたのは去年の五月のことでした。ここ数年

花屋さんでさまざまな色、形のチューリップを見かけるようになったのですが、当地にきて、その種類の多さには

本当に驚いてしまいました。私はその中でも特に原種のチュ

ーリップに心魅かれました。花屋さんで売られているチュ

ーリップとは別物の、エキゾチックな魅力にあふれていました。



「のうぜんかずら」

子供が最初に絵に描く花はチューリップが多いということですが、幼い子の心にも訴えかける素朴な力強さ、とでもいったものがこの花にはあるような気がします。私も色とりどりのチューリップに囲まれて、楽しい気分の仕事させてもらいました。その時のチューリップの絵を今年のチューリップフェアの会場でたくさんの人達に見ていただくことができたのは、私にとって、とてもうれしい出来ごとでした。

さまざまな花とのかかわりあいのなかで、行った場所、出会った人々など、どれも私の大切な思い出です。

略歴



まつおか ますみ

一九五六年 東京都に生まれる。

一九七五年

「美学校」絵文字工房

一九七六～七七年

「美学校」細密画工房

一九七九年

「美学校」写真工房にそれぞれ在籍

一九九五年

四月よりNHK「趣味の園芸」表紙画担当。著書に「鳥暦花便」（小学館一九九一年共著）、「野の花フィールド日記」（山と溪谷社一九九五年）がある。



▲砺波チューリップハウス

創刊号でも紹介した『カナディアンチューリップフェスティバル』が五月九日から十九日まで、カナダの首都オタワ市で開催されました。今年で四十七回を数えるこのフェスティバルのテーマは、「日本」。五月十五日を「砺波市の日」とし、砺波市からは市長を始めとする市民交流団四十五名がオタワ市を訪れ、文化芸能の交流を行いました。

このフェスティバルは、メイジャーズ・ヒルパークをメインとして、幅十メートルの花壇が一キロメートル続くダウズ湖周辺など二十カ所の会場を、三十品種三百万球のチューリップが美しく彩っており、その運営は在住日本人を含む千二百人以上のボランティアに支えられていました。オタワ市は北海道の稚内市とほぼ同

緯度で、一年の半分が寒さの厳しい冬。時には氷点下三十度にさがるため、運河も凍り、スケートリンクになります。春を待つ心、平和を願う心のシンボルとして、チューリップを懸け橋とした交流が実現されたのです。

Canadian Tulip Festival

～カナディアン チューリップ フェスティバル～



会場内に造られた「砺波チューリップハウス」は砺波地方の農家をイメージしたあずま屋造りの建物で、中にはパネルによる砺波市の紹介や



▲'97パンフレット



▲チューリップ四季彩館
チューリップテラス

四月二十五日から五月五日まで、砺波チューリップ公園を中心に『97』なみチューリップフェアが開催されました。期間中約四十万人の方々が訪れ、色とりどりのチューリップを楽しんでいました。

今年は暖冬であつたこともあり、例年よりもチューリップの生育が早く進みましたが、遮光ネットの設置や一部植え替えを行うなどの調整の結果、チューリップは期間中にわたり美しく咲きそろっていました。

チューリップ公園では大花壇



を始め、造形花壇や花の浮き島、フラワーヒルなどがチューリップのさまざまな表情を見せていました。

今年お目見えした『緑の動物園』では、可愛い動物のトピア



▲フラワーヒル



▲獅子舞

広場では獅子舞、民謡民舞が披露され、大変人気となり観客が一緒になって踊る姿も見受けられました。



投扇興、折り紙の実演など日本の文化を伝える各種催しが行われ、期間中五万人を超える来館者で賑わいました。竹馬、けん玉等の昔ながらのおもちゃの体験コーナーでは、大人も子供も一緒に夢中になって楽しんでいました。



▲友好文書調印式



「砺波市の日」には砺波市チューリップフェア推進協会とカナディアンチューリップフェスティバル協会の間で、今後の友好交流に関する協定書の調印を行いました。協定書には日本・カナダ両国民の相互理解と国際協力を一層進めることなどをうたい、両代表の砺波市長の岡部会長とドナ・ホルトン会長がサインしました。ここにチューリップを懸け橋として新しいきずなが生まれたのです。今後もイベントにとどまらず市民レベルでの交流が望まれています。



'97となみチューリップフェア



リーの中で楽しげにくつろぐ家族連れの姿も見受けられました。期間中チューリップ四季彩館では「幻想と楽園のハーモニー」をテーマに、チューリップを主体とした春の草花による「フラワーショー」や松岡真澄植物画展が展開されました。また、会

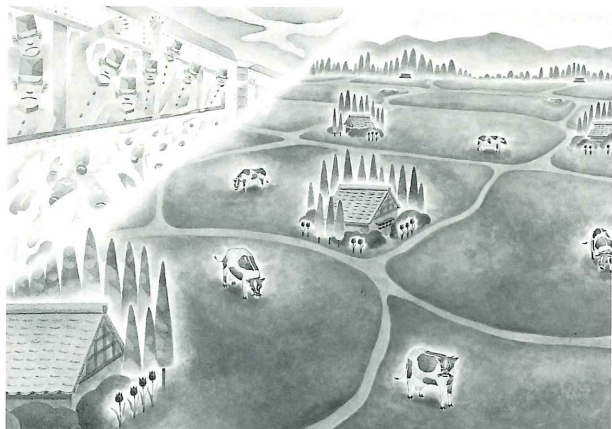
場内に今年四月にオープンした砺波市美術館では「北大路魯山人展」が、砺波郷土資料館では「城端線開通百年展」が開催され、それぞれに落ち着いた雰囲気のもとで、深く大きな感銘を呼んでいました。

砺波とチューリップ ―後編―

〜チューリップ四季彩館ミュージアムより〜

チューリップ栽培の 生き残りをかけて 〜衰退と復活〜

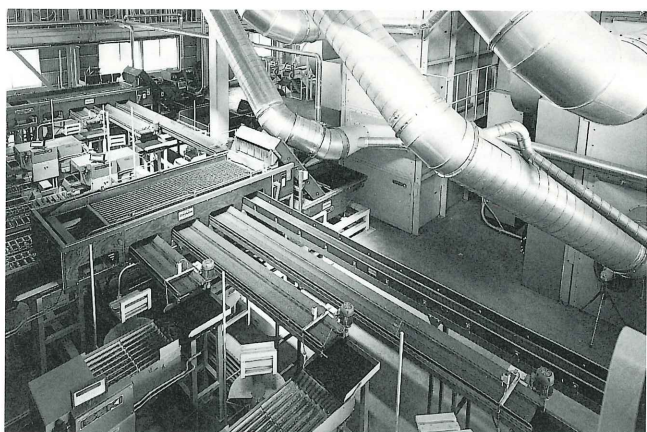
太平洋戦争の開始とともに、一球のチューリップ球根も輸出することができなくなり気を落とす組合員でしたが、輸出契約が済んでいた三百万球の保証金をもとに多くの農家は乳牛を買い、そのフンや敷わらを畑に施して土を肥やし次の栽培に備えたのでした。しかし、畑で食糧以外



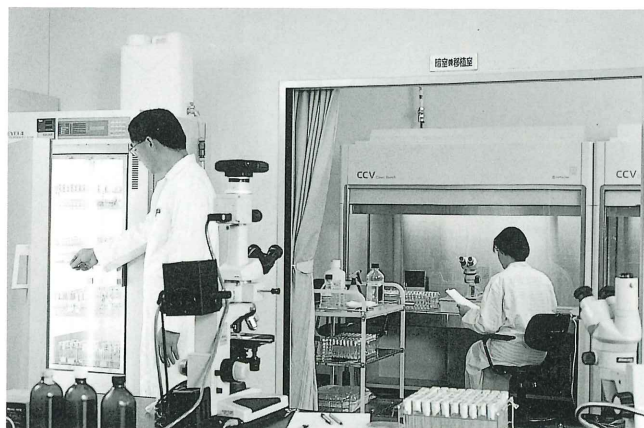
の作物は作れなくなり、戦争激化とともに、チューリップ栽培をやめる農家も増えます。そのような状況の中で、屋敷の片すみやあぜの一部に植え付けて種球根を保存栽培する作業が続けられたのでした。

アメリカとの関係は必ず回復するという「思い」は、終戦を機に四谷順三氏、瀬尾正雄氏、水野豊造氏を中心に『組織』づくりに向けられ、昭和二十一年、富山県球根協会を設立します。この時集まったのは十五町村、百二十名、作付面積二・一ヘ

クタールからの出発でした。やがて栽培希望農家が急増したため、種球根は不足しがちになりましたが、不平不満を言う人もいませんでした。そして、過去二十年間の経験と反省を活かしながら、協会の規約や体制作りに努め、昭和二十三年には県下唯一の専門農協である富山県花卉球根農業協同組合を設立。以後、チューリップ球根栽培は前進を続け、現在では年間約六千万球を出荷するに至っています。



▲球根調整プラント



▶チューリップ遺伝資源センター内 研究室

更なる発展を 目指して

昨今の日本農業をとりまく厳しい流れは、特産のチューリップ球根産業についても決して緩やかではありません。わが国の経済の変動に伴って起こった産業構造の変化によって、労働力の流出、後継者難などは避けられない課題です。また、円高による輸出から国内向け販売への転換は、オランダとの市場競争という状況をもたらしています。これに対

し、砺波では単位面積当たりの生産球数の増大、球根調整プラントの建設による省力化と品質の向上、試験場におけるオリジナル品種の育成、水耕栽培セットやチューリップ花び

ら染めなどの付加価値製品の開発等、生産・普及・行政が三位一体となつて、将来に向け更なる発展のために力を尽くしているところです。



ミニ知識

チューリップ 花びら染めの手順

- ① 花弁（花びら）を分ける。
摘んだ花は新鮮なうちに花弁と花芯に分け、花弁についた花粉を洗い落とし、水切りをします。
（着物一反を染めるのに約二千個の花が必要）
- ② 色素を手でもみだす。
金属分が出ないホーローびきやプラスチックの容器の中に花弁を入れ、洗濯板などを使って、花弁が白くなるまで手でよくもみます。
- ③ 四〜五日間放置し、発酵させる。
もんだ花の中に、ヒタヒタになる程度に水を張り、約〇・二％の酢酸を加え、四〜五日間置いて十分に発酵させます。
- ④ 発酵液を煮る。
色素が液中に十分に溶けているかを確かめ、火にかけて約二十分煮ます。
- ⑤ ろ過して、上澄み液を染液にする。
煮出した発酵液を、天竺木綿もしくは麻の布でろ過し、一晚置き、その上澄み液を染液にします。
- ⑥ 染色させる白生地の下処理をする。



染色する白生地には、染着速度が速く堅牢度の高い絹が適しています。染色する前に煮沸させ、糊分などの不純物を取り除き、一晚水にさらしておきます。

⑦ 色を染める。

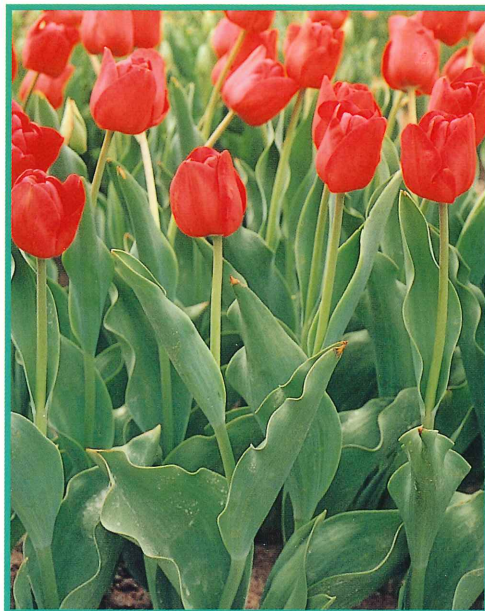
染液の入ったステンレス容器（鉄分が出ない容器が適当）の中に白生地を入れ、八十五〜九十度になるまで徐々に温度を上げ、約四十分熱染します。

⑧ 媒染します。

花色と違う色を出したい時は媒染剤を用います。別の容器に媒染液を用意し、熱染、媒染を繰り返します。

⑨ 水洗い後、乾燥させる。

染め上げた布を流し水でよく洗い、バスタオルにくるんで乾燥させ、アイロンがけをして仕上げます。



◇表紙の写真

～富山で生まれたチューリップ～
 サクラ／Sakura;農林1号(一重晩咲き)
 昭和40年(1965年)農林登録。花色は鮮桃赤色。砺波地方では4月下旬開花。砺波園芸分場(現富山県農業技術センター野菜花き試験場)最初の育成品種。日本で育成されたことを強調して命名



チューリップ四季彩館
 TONAMI TULIP
 GALLERY

(財)砺波市花と緑の財団
 〒九三九一三
 富山県砺波市中村一〇〇一
 ☎ 〇七六三一三三七七六
 FAX 〇七六三一三三〇〇九〇